

せたな力

「せたな力」。
この言葉は、町の将来像、まちづくりのキーワードになっている言葉です。

町は合併から9年目を迎えますが、基幹産業である、農業、漁業、商工業の後継者・担い手の不足、若者の都市部への流出などにより少子高齢化が進み、町の人口は合併当時から、約1500人も減少しています。

これまでに町の小学校は3校、高校は1校が閉校となり、今年3月には小学校1校・高校1校がそれぞれ閉校となるのが現実です。

しかし、こうした現状の中で、学校を卒業後、地元に残り様々な場所や場面で頑張っている方々がいます。
いろいろな思いを抱きながら町内で活躍し町を支えている方の中から、特に64年の歴史に幕を下ろすことになった瀬棚商業高等学校を卒業後、地元就職した方、また家業を継いで活躍している方を中心に、今の「せたな」に感じていることや、これからの「せたな」に対する思いを、インタビューしてみました。

地域を残すことが町を守る力になる。

酪農業 弥左直人さん (瀬棚区西大里)

―過去の経験で今活かされていることは

学生時代は内気な性格でした。それを自分で克服したいと思っただし、高校の担任の先生が自分で行動できるように、家業を継ぐ前に外を見た方がいいと背中を押してくれたこともあって、地元の建設会社に勤めました。家業を継いでから、各地へ毎年見学に行きますが、初めて会う方と抵抗なく会うことができません。酪農のことが勉強になるのはもちろんですが、日常生活のトラブルを対処する力もついたと感じます。自分で考え行動することができるようになり、先生に感謝しています。

―自分の仕事に今思うことは

本格的に酪農を取り組むよう



左から直人さん、斗真くん、大地くん、麻衣子さん。麻衣子さんは兵庫県出身で、ヒルトップファームに勤めていたことがあり、縁あって4年前ご結婚されました。

になつてからは牛を管理することの難しさを改めて感じました。例えば、牛は700kg前後の体重を足の爪で支えています。この爪をまめに切つて病いやケガをさせないように管理することが大事。手をかければかかるほど結果が出ます。1頭1頭顔を見れば調子がわかるようになります。

また、共進会では道南代表に3大会連続で選ばれ、北海道大会に出場しています。会場には牧場名が大きく表示されるんです。それは嬉しいですよ。各地から牧場を見に訪ねてくる人もいます。

―「せたな」に今思うことは

大里っていうこの地域が好きだし、青年団の皆と地域を守りたいっていう気持ちが大いあります。秋に轟神社例大祭があります。秋に轟神社例大祭があり、撲など昔から続いている行事があります。子供達のために残していききたいですね。地域全体で協力しお互い助け合つて、町を作っている一つの地域であるこの大里を残していくことが、せたな町全体を守っていくことにつながっている、そう思っています。

後継者を育てる力になる。

漁業 新保法男さん (瀬棚区本町)

―漁業を継いだ理由は

漁師になるなんて全く思っていなくて、東京の配送会社に勤めていました。1年後、一時実家に帰る事情ができたので、親父を手伝い、また東京へ戻ろうと思っていました。漁業が仕事になりました。

―自分の仕事に今思うことは

漁業は、3K「きつい・汚い・危険」の代表的な仕事だから、始めたころは嫌でした。当時は親父と沖に出るたびにケンカして、毎日嫌な空気で我慢の合合いでした。それがいつからか、だんだんやりがいを感じるようになりましたね。

大漁のときは気分がいいし、



左から法男さん、温大くん、恵さん、洵季くん、汰知くん。法男さんは、底網漁、定置網漁、ホタテの養殖などに取り組んでいます。

嬉しいですよ。安くても、たいした売れなくても魚がたくさん獲れたときってのは本当に気分がいい。だから、そのためにはどうしたらいいかって考えるようになった。

―「せたな」に今思うことは

どの産業も同じだと思いますけど、後継者問題は深刻です。今20〜30代で漁師をやっているのは数人です。後輩や子供達に、頑張れば頑張つただけ稼げるってことを行動で見せたいと、ここ数年で思うようになりましたね。

後輩には、やってみようと思つたことは行動してほしいし、子供達には頑張つてるところを見せたいですよ。「大変だ、苦しい」って姿ばかり見せれば、やってみようなんて思いません。面白いんだぞってところを見せれば、後継者も少しずつだろうけど育つんじゃないかと思つています。姿を見せて、町の産業である漁業を守っていきたいって思っています。